

# 「教育の基礎としての一般人間学」

實 松 宣 夫

“Allgemeine Menschenkunde als Grundlage der Pädagogik” bei Rudolf Steiner

Nobuo SANEMATSU

(Received September 13, 1990)

## はじめに

「自由ヴァルドルフ学校（ルドルフ・シュタイナー学校）」の教育はおもしろい。この学校は特色のある顔をいろいろと持っている。例えば、国家からの財政援助は一切受けない。管理職はなく、その仕事は教員が交替で引き受けている。初等教育の段階では八年間の担任制を採用する。その間、生徒の試験はない。また「エポック授業」とか「オイリュトミー」などの独自の授業課目を持っている。それらのどれ一つを取り上げても、我が国の今日の学校教育では実施することはできない。と言うより、そういう教育もあることを考えることさえできない。

「自由ヴァルドルフ学校」は、私達が「教育」と考えているものの枠を越え出ている。それでいながら（否、それがために）私達を羨望させる教育実践を展開している。

ルドルフ・シュタイナーは数多くの方面のそれぞれについて超人的な足跡を残したが、教育において最も成功した業績を残した。教育に関する発言だけでも膨大であるが、その中から筆者は「教育の基礎としての一般人間学」を取り上げて以下で考察してみたい。それというのも、本書は急拵えであった「自由ヴァルドルフ学校」の最初の教師となる人々を対象として行なわれた連続講義だからである。この教員養成は1919年8月21日から9月5日までの二週間で終了した。受講者は22名である。シュタイナーは彼の創設する学校の教師に必要な人間理解（人間学）を、そこで端的に表明しているのである。ちなみに現在でも、「自由ヴァルドルフ学校」の教師を希望する人は「教育の基礎としての一般人間学」は読了しなければならない。

確かにこの書のみでシュタイナー教育を語るというのは一面的である。しかし、筆者はシュタイナー教育について語る多くの紹介書が回避している問題をこれに取り上げたいのである。その問題とはシュタイナーの「エソテリズム」である。シュタイナーの教育論には数多くの独創性が見られるが、その根底に常人には窺い知れない神秘の深淵が開いている。私達は形式論理学を使用して、シュタイナーの文章を命題関数に分解して考察するならば、彼の語る言葉はまともにも考慮するに値するものでないということもできる。シュタイナーの主張を支える正当性の根拠は、一人、彼の内的体験にのみあるのであって、それは経験科学を成立させるところの実験をふまえた証明、あるいは反証可能性を無視している。今日の科学的思考方法とその知識を基礎とすれば、批判は容易である。シュタイナーのエソテリズムは、彼を理解しようとする集団内で信仰されることがらにすぎない、という批判は可能である。しかし、シュタイナーの教育論を述べようとすれば、彼のエソテリズムに立ち入らなければならない。それと言うのも、これを理解できなければ彼の言明は分からないに等しいからである。シュタイナーは自身がオカルトの世界を扱っていることを明瞭に自覚している。そのうえで極めて慎重に言葉を選び、その言葉が誤解を受けないように、超感覚的世界との関係を正しく象徴するものであるよ

うに配慮しているのである。シュタイナーは近代科学の成果を否定するのでは決してない。しかしその限界を見ること、そしてそこから超越することの必要性を訴え続けるのである。

「自由ヴァルドルフ学校」はシュタイナーの人間学（「人智学」）の真実さを世間に実証する舞台となるはずであった。そのためにこの学校の教師は、何ものにも優先して、人間存在の本質理解を確認し合うことが必要であった。教師は超感覚的世界との関係で人間を理解することができる人でなければならない。これがシュタイナーの講義の前提であり、また結論である。シュタイナーの人間理解が生かされた結果として、教育実践の場は、数多くの新鮮な独創を加えることになったのである。そのいくつかは以下に見ることになるはずである。

## I

シュタイナーは最初から霊的世界（精神世界）との関連を語る。彼の人間学は、この地上で物質的に生きる人間に限定されない。「霊界の諸力と私達」の関係を課題とする。この関係について述べることは、シュタイナーにとっては「一種の祈り」（8）を行うことであった。

誕生する「自由ヴァルドルフ学校」は特別な任務を持っていた。一つの新学校がたまたま、今、開設されるのではない。ある特別なものが実現されるのである。それは「普遍界の秩序の栄えある御業の一つ」になるはずのものである。シュタイナーは聴講生と共に確認し合った。「ここで私達の理念を本当に具体化しようと思う。」（8）「私達一同は、この常ならざることの生ずる場所に……カルマによって呼び集められた人間たちなのであると考えたい。」（9）

私達が以下に見ていくシュタイナーの一般人間学とは、宗門の同志に語られた彼の信仰告白なのである。そのため、すぐに宇宙的スケールの歴史観が語られる。教育の課題を考察することは、「アトランティス期後第五文化期の教育課題」（7）を考察していくことであると。その第五文化期は15世紀の半ばより始まり、今日ようやくその期の特色が現れるに至っている。シュタイナーは歴史観について詳しく語らない。ただ、今日の文化の特徴の一つだけ指摘する。それは「最も精神的な領域に至るまですべてが人類のエゴイズムのうえに構築されている」（11）ことである。このエゴイズムと戦うことが時代に課された特定の課題である。

さて、人間の一生について語る時、人々の一般的理解ではそれは誕生から死に至るまでの期間である。しかし、シュタイナーは輪廻転生を事実とする。「人間は死と新たな誕生との間の長い長い期間を霊界において成長し続けており、この成長の過程で、ついには霊の世界から見て死ぬべき時点に達する」（12）これが誕生である。

子どもは、（特に幼い子どもは）霊界での生の継続を生きている。教育とは、子どもが誕生する前に霊界で、高次の霊的存在者たちが為していた仕事を、地上で継続することに他ならない。教師はこの「事実」を自覚して始めて、その教育と授業に正しい方向を発見することができるのである。シュタイナーはこの「事実」を強調し、それについてはいたずらに問いを重ねないように戒めている。

誕生前の教育というものとは考えられない。その時期に大切なのは、「母親が子どもの誕生まで正しい意味で倫理的であり、かつ知的に見て間違いないものを自分自身の中で実現するように努める」（14）ことだけである。胎教しようとする考えは捨てるほどよい。その代わりに、自分自身が正しい生き方をしようとするほど胎児のためになるのである。

シュタイナーによれば、人間は誕生と同時に霊界から物質界へ移行する。ただ、物質界に入る前に、霊・精神（Geist）と魂・心性（Seele）は一体となっていて、その「霊心」あるいは「心霊」と呼ばれるものが、物質身を衣服とするのである。誕生は同時に受肉の完成である。

しかし、生まれたばかりの新生児では心霊と物質身がまだ結合していない。そのために両者

を融合させ、調和させる必要がある。

教育の課題となるその融合、調和は、まず「呼吸」について為されなければならない。シュタイナーは呼吸を重要視する。呼吸には心霊と物質身を結合させる力があるためである。後に見ることになる「人間の三層構造」においては、呼吸は中間の位置を占め、両極を結合する仲介項となるのである。シュタイナーは子どもの呼吸はまだ完全ではないと考えている。しかし注意しないとイケないのは、彼の言う呼吸は生理的なものに限定されていないことである。「内面的に正しく呼吸すること」(18)が問題とされるのである。

心霊と物質身の融合、調和をはかるためのもう一つの教育課題は、子どもの「睡眠と覚醒」の指導である。「睡眠と覚醒」の作用についても後に見ることになるが、この作用も心霊と物質身の両方に関係している。シュタイナーは子どもの睡眠は大人の睡眠とは違うと考えている。この睡眠と覚醒も、先の呼吸と同様に「内面的な意味」で理解しなければならない。

上に見てきた二つの教育課題は、新生児や子どもにのみ適用されるのではない。「呼吸」そして「睡眠と覚醒」には「宇宙論的意味」(21)が付与されており、象徴的に言えば、教育とはこの二つの作用を正しく、適切に機能させることなのである。そのことと次のこととは同義である。「(教育は)一つの方向として心霊を物質的肉体の中に導き入れることを目標とし、もう一つの方向としては、物質的肉体の持つ物質的な要素を心霊の中へ送り込むことを目標としている。」(20)

シュタイナーは教師に宇宙論が必要であると言う。教師が人間存在の宇宙的なあり方を本当に認識すれば、いたずらに自分に囚われることが無くなると言う。例えば、腕白小僧やいたずら娘の嘲笑に出会っても、雨傘を持たずに外出していて雨にあった時のように受け止められるのであると。また、「精神的な関係が成り立っているという確信をもって教室に入っている」(23)のであると。

これは授業の技術を過少評価することではない。しかし技術よりも教師の内面性をより重要視する考えである。教師はその人の「存在」において仕事をする。「Aという教師がクラスのドアを開けて生徒達の前に現れるか、同じことをBという教師が行なうかでは、すでに大きな違いが生じるのであります。この大きな違いは、一人の教師の方がもう一人の教師よりも教育上の外面的な技術が上手であるということだけから生じているではありません。授業の際に現れてくる本質的な違いは教師が自分の生活の総ての瞬間に、どのような方向に自分の理念を向けて生きているかにかかっています。」(21)

## II

人間の心(魂)を舞台として、宇宙はその作用をどのように展開しているのだろうか。

まず、「表象」である。心理学では表象が像(映像)の性質を持つことを認めている。表象は現実的な実体ではない。また実在するものの性質を持つのではない。「考える」ことの中のどこを探しても「存在」はない。それでは表象を像だとして、それは一体何を映した像なのであるか。映像のもとになったものは何か。

シュタイナーによれば、心理学は上の問いには解答できない。解答できるのは宇宙との関係で考えられた彼の人間学(「人智学」)のみである。それによると「表象とは、誕生以前ないし受胎以前に体験した総ての体験の像である。」(27)すなわち、表象は、死と新しい誕生との間の生が、現在の生の中に映し出されたものなのである。この見解は筆者にとっては次々と出現する驚きの最初であった。

次の驚きは「意志」の説明である。シュタイナーによれば、意志とは「私達の死後に私達の中で心霊的実在(Geistigseelische Realität)と化するもの……の種子」(29)である。人間は死

によって地上の生を終えるが、意志はその死の線を越えて進むのである。

表象と意志は、人間の心における心霊的なものの二様の、対照的な現れである。心は表象と意志に二分されるが、両者の境界領域も存在する。すなわち、表象活動と意志活動とが混在している領域であって、シュタイナーによればそれは「感情」である。物質的肉体を持つ人間の生涯はそのまま感情的生活であるということができ、この生活には誕生前の事実が反映し、同時に死後の事実の種子が保持されているのである。

感情には特別の力が存在している。「好感 (Sympathie)」と「反感 (Antipathie)」である。そしてそれぞれに、好感は意志と反感は表象と関連している。「私達は反感の力を自分の中に持っており、その力によって、誕生前の要素を単なる表象像に変えてしまうのです。また、死後に意志という、実在としての私達の存在から輝き出ていくものを、私達は好感の中で私達自身と結び合わせるのです。」(31)

さて、感情が有する反感の働きで表象を創り上げる行為が「認識」である。また、反感の力が十分に強い時に成立するのが「想起 (記憶)」である。「想起とは反感の密度の高いものに過ぎない。」(33) また、表象を創り、これを想起することで改めて反感 (嫌悪) が確認される時に成立するのが「概念」である。このように感情の一方の力である反感の系列には、表象、認識、想起 (記憶)、概念がある。

感情のもう一方の力である好感の系列を見てみよう。まず意志である。次が「ファンタジー」である。「反感が強くなったとき、表象が想起像と化したように、好感が十分に強くなるときには好感からファンタジーが生じます。」(34) このファンタジーが強くなって感覚の中にまで入り込むと「イマジネーション」が成立する。イマジネーションによって人間は外界の知覚が可能となる。後に見るように「感覚」の基本は意志作用 (好感) なのである。たとえば、「白墨は白い」と感じるのは表象 (認識) 作用ではなく、意志作用の結果なのである。

視点を変更しよう。シュタイナーによれば、反感と関連する表象、想起、概念は「神経組織」と結合するのであるが、神経組織がそれらを生み出すのではない。逆である。「誕生前の心的なもの (das Seelische) は、反感、想起、概念という通路によって人間の肉体の内部に働きかけるため、自分の器官として神経組織を作り出した」(35) ののである。この神経組織と正反対の位置にあるのは「血液」である。意志、ファンタジー、イマジネーションの通路によって、人間の死後にその本質を実現する種子となるものは、血液の中に保持されている。物質的肉体は神経と血液という対極的な作用の中で生きるのである。「血液は常に霊化しようとし、神経は常に物質化しようとしている。」(38) このことについても後に見ることになるはずである。

シュタイナーは人間の本質を宇宙的なものとの関連において言明する。そうした理解は、彼においては単に一つの解釈や見解なのではなく、「事実」そのものであった。彼の「事実」には今日の科学で納得することの困難なものもある。しかし、シュタイナーは「私」と呼ばれる一人の人間の体験の内側から宇宙の営みを受けとめて、この営みの中から解答する道を発見したのである。彼の発言の全ての新鮮さはそこから湧出するのであるから、私達に一般的な科学的思考を不変の準拠枠としないよう、もっと慎重にそして柔軟でなければならない。むしろ、シュタイナーに学ぶことで、私達は無意識にそれを採用している思考基盤の破れ目を発見することができるのである。

例えば、人々は頭脳を他の身体部位よりも優先する身体観を採用しがちであるがシュタイナーはそれを戒める。彼は人間の肉体の三層構造について語る時、脳・神経組織を中心とする頭部は「すでに退行現象に入っている」(41) と述べて、ひたすら栄養を摂取するだけであるこの部分への適正な評価を訴えるのである。「人間は自分の脳蓋部に何も自惚れを持つ必要はないのです。」(41) シュタイナーと共に「霊的な眼で見るとすれば」、すなわち宇宙論的に見

るならば、頭部は「宇宙の反感」(42)によって、宇宙が自分自身の似姿を吐き出したところに成立しているのである。一方、宇宙の好感と対応するのは人々が頭部に比較して劣等視している人間の四肢部なのである。

ともあれ「意志形成との表象形成との間に非常に大きな違いのあること」(43)は理解しなければならない。頭部の機能である表象形成に強き働きかけることは、すなわち過剰な知育は子どもを死滅させるものである。「教育によって子どもの中へ注ぎ入れるものの中へ、抽象的な概念を混入しすぎはなりません。皆さんはその中へ、むしろできるだけ多くのイメージを入れるようにしなければなりません。」(43)イメージはイメージネーションであり、好感とファンタジーとによって進むものである。一方の概念は抽象であり反感と想起を必要とするのである。シュタイナーが教育を「教育芸術」にしようとしたのは、教育が好感とファンタジーの系列を離れることがあってはならないと見たからである。

### Ⅲ

教師は自身の行為の背景として宇宙の諸法則の理解を持っていなければならない。この理解を基礎として、教師集団の全構成員は完全に平等である。低学年教師も高学年教師も同等である。また、管理職は不要である。

シュタイナーによれば、人間存在を捉えるためには、宇宙の諸法則に応じて、人間存在を三重構造において考えなければならない。三重構造とは霊(精神)、魂(心性)、物質(肉体)である。教育はこの三重構造に配慮して為されなければならない。しかし、時代の人々は人間存在を二重構造(精神と物質)においてしか捉えない。そのために文化全体が歪み、授業さえその影響を受けている。

時代の文化を代表する自然科学からユリウス・ロバート・マイヤーの業績とされる「エネルギー不変の法則」を取り上げよう。シュタイナーによれば、この法則の理解は誤った思想を拡大しているのである。それと言うのも、人間の本質は「人間を通じて不断に新しいエネルギーが形成される」(48)ことにあるからである。マイヤーが発見したのはエネルギーは変形するという事実であるにすぎない。それなのにマイヤーの発見が不変の「法則」と解釈され、エネルギーを形成するという人間の本質が無視されるのは、時代の世界観が人間を人間以外の自然界と同様に処理するものとなっているためである。これは、外的自然に対する表象活動によって人間をも捉えようとすることに他ならない。

しかし、表象活動は自然の中の「常に死滅し続けている部分」(50)しか把握できない。自然科学の発見するものは、言うならば自然の「屍体」についての発見である。

自然に向かう別の方法は意志によって体験する方法である。意志活動は表象活動とは全く違うものであり対照的な作用をするものであった。人々は「感覚」は表象(認識)の働きであると安易に考えているが、シュタイナーによればそれは意志の働きである。例えば、ものを見るということは、一種の触手が目から対象に向かって伸び、対象に触れることに等しい。「感受する」ことは積極的な行為であって、人間が意志的に対象に向けて発射するものなのである。

シュタイナーは述べている。「人間は自然と相対する時、自分を働かすことによって自然の中の死んでしまった部分をことごとくかき集め、この死んだものを分析して、そこから法則を得る。だが一方では、自然の中においてこのような死物の胎内より未来の世界となるべく蘇ってくるものを、人間は意志の働きを通して把握している。意志は人間自身には計り難く不安定なもののように思われるが、感覚作用の内部に深く浸み透っているのである。」(52-53)

自然とは自然科学の言うような一つの単一体ではない。人間がその中に加わることで始めて本来の自然を実現したのである。これが宇宙における人間の地位である。人間は地球の進化の

ためのパン種である。前に見たように、人間は霊の世界から物質界へ降りてきて肉体という衣服を身につける。しかしこの肉体は誕生時と死亡時とは同じでない。変質が生じている。この変質は生存中に肉体が人間の心的霊的な力を受けたためである。そして変質した肉体を死によって宇宙に返却する。宇宙は人間の屍体を受けることで本来の進化を歩み続ける。この進化は今もなお持続しているのである。「人間の屍が、その持っている力を地球の進化に注ぎ込むという営みを常に行っていないならば、地球の進化はとうの昔に終点に達していたでしょう。」(57)

人間に死をもたらす力は正しく理解されないといけない。シュタイナーによれば、この力が肉体の内部に作り上げたものは、骨格組織から神経組織に至る一連の器官である。「死をもたらす流れが、骨格・神経組織の中で作用している。」(61) 一方、「常に生命を与える力は、筋肉・血液組織及びそれに付随する一切の器官の中で作用している。」(61) 神経は死んで骨格化しようとするがそれに成功しないのは、筋肉・血液組織と関係することでそこから対抗作用を受けるためである。

骨格・神経組織と筋肉・血液組織の対抗関係は、前に見た表象作用と意志作用の関係である。例えば「目」では、後退した骨格組織の中に神経が送り込まれている。同時に血液も送り込まれている。そのために目では表象作用と意志作用が対抗しつつ結合されるということになっている。視覚は触角の動きに等しいと前に述べた。しかし視覚は文字通りの触角ではないのである。

人間は一方では常に死滅を続け、その作用は骨格・神経組織の中を流れている。しかし人間は他方では常に生成の過程にあって筋肉・血液組織がその作用を保持している。シュタイナーによれば、人間存在のこの事実が理解できない思考法がある。しかもそれは強いのである。それは自分自身を世界の傍観者とすることに満足している思考法（とりわけアングロサクソンの哲学）である。時代の哲学が認識という死滅的要素の中に住んでいる自分自身を自覚していないことは問題である。

「人間は決して単なる世界の傍観者ではない。人間は世界という劇の舞台なのであって、ここでは宇宙の偉大な出来事が常に繰り返し演じられているのです。」(66) 「人間の中で完成するものは、同時に一つの宇宙的生起であって、それゆえ人間の心は、宇宙的生起の演じられる舞台であり、決して人間的生起そのままにとどまるものではないのです。」(66)

シュタイナーによると、「私達が事物に即して何を体験するかを見きわめるために、私達の心の生活 (Seelenleben) を用いる」(68) ののであれば、すなわち個人の体験に生きている心性をふまえて考えていくなれば、「エネルギー不変の法則」のような思想が誤りであることは明瞭なのである。

#### IV

将来の教育や授業では意志と感情の形成が重視されなければならない。表象（認識）形成の重視ではない。

シュタイナーは前に、感情を説明して意志と表象の中間領域と述べていた。意志と感情の関係について、さらに詳細に見ていくことにする。意志とは人の死後に実現されるものの種子であった。その意志がまだ自己表現をしないで人間の心性にとどまっているとき、その意志の現れは感情となるのである。「意志とは感情が実践に移されたものであり、感情とは抑制された意志です。」(69-70)

意志の現れ方を見ていく前に、シュタイナーの人間理解における三重構造に言及しておこう。三重構造とは霊、魂、肉体であった。

人間の霊性は「霊我 (Geistmensch)」、「生命霊 (Lebengeist)」、「霊人 (Geistselbst)」の三層があり、前者から後者になるにつれ順次高等となる。三層は共に人間の死後に霊界で成長するもので、今日の人間にはほとんど認知することができない。今日の人間に認知できるのは魂 (心性) である。これは更に「意識心性 (Bewußtseinsseele)」、「悟性的=ないし情緒的心性 (Verstandes=oder Gemütsseele)」、「感覚心性 (Empfindungsseele)」と三分される。また人の肉体は「感覚身 (Empfindungsleib) あるいはアストラル身 (Astralleib)」、「エーテル身 (Ätherleib)」、「物質身 (Physischer Leib)」に三分される。人間の三重構造とは以上の九個の構成要素で人間を捉えようとするものである。

さて意志であるが、これは物質身では「本能」として現れる。エーテル身では「衝動」である。感覚身では「欲望」となる。本能は外側からの強制であり衝動ではそれが内面化している。内面化していても衝動では同形性が特徴であるが欲望になると一回ごとの個性が強くなる。本能、衝動、欲望の順で心情的な性格は強くなるのである。

人間の肉体に住んでいる意志は心性においては「動機」として現れる。心性の三要素は今日の人間では相互に混じり合っている。(その混合体を統一するものが自我である。) 人間以外の動物は欲望までは所有しているが動機は持っていない。

人間には更に、霊界で実現されているもののかすかな光が意志として現れる。霊性における意志の姿がそれであって、ある行為を為した後に「もっと良くやれた」とつぶやかせるものである。これはエゴイズムに結びつく後悔ではない。未来における「願望」である。願望が具体的に明瞭になると生命霊における「意図」となる。そこでは同時に表象が作られる。表象を生み出す背後の意志的なものが意図である。意図では自分の内に住む「もう一人の人間」が明らかとなる。意志は最後に、霊人における「決意」となる。

人間は地上の生活でも願望、意図、決意を体験しているようであるが、それらは総て像の姿をとることから分かるように表象と化した願望、意図、決意なのである。霊性における意志の人間本性におけるあり方は「種子」である。今日の人々はそれを窺い知ることはむづかしい。

しかし、教育や授業が意志形成でなければならないということは、意識下の、人間本性の深みにあるものに教師は働きかけなければならないということである。教師は普通一般の人間関係に合わせて授業を作っていくだけでは不充分である。「教師はこの内部に住む人間を把握することから出発して、そこから授業を形成しなければなりません。」(85)

授業を普通一般の人間関係に合わせるという誤謬を犯しているのは、例えば、ルナチャルスキーの学校改革である。シュタイナーによれば、マルクス主義的社会主義者の理想に従って組織される学校は「恐るべきもの」(86) である。子ども達を、ちょうど大人同志がするように交際させようとしているためであるが、それは「教育の場において行い得る最も誤った行為」(87) なのである。社会主義者の教育では子どもの意志が形成されていないのである。

それでは子どもの意志を形成する本来の教育や授業はいかにあるべきなのか。それはまず知育ではない。知的理解のために広く行われている勉強の強制は、意志の形成には破壊的である。知的なものではなく、生成しつつある意志、すなわち感情こそが注目されるべきである。子どもの意志に働きかける教育は「感情本性に対して良い影響を与える」(88) ものでなければならない。

そのために推薦される方法は反復である。「無意識的な反復は感情を耕し、完全に意識された反復は本当の意志衝動を耕します。」(89) 「意志の陶冶は反復に、特に意識的な反復に依存するのです」(90) 意志形成のためにこそ、知育のために重要とされている反復が生かされなければならない。行為を反復することは「習慣」の形成である。行為が習慣となりさらに無意識の習慣にまでなると、感情と意志は最もよい形成を受けるのである。

なぜ芸術的な要素は、特に意志形成に働きかけるものとなるのか。芸術は練習という反復作業を繰り返す。加えてその反復がその都度喜びを体験させてくれるためである。だから授業は芸術的な要素を生かして構想されるのが良い。

## V

人間の魂（心性）の働きは認識、感情、意志の三つであった。しかしそれらの三つは事柄を説明するための便宜上、三つの独立した作用であるかのように述べたのであり、事實は相互に侵入しているのである。図式的理解は誤りである。

心性の働きの相互侵入は、心性が表現される場である肉体についても言える。すでに見てきた人間の目では、骨格・神経組織と筋肉・血液組織が相互に入り込んでいた。反感にもとづく思考・認識作用は好感にもとづく意志作用と出会うのである。二つの作用が出会うところに感情作用は成立する。だから、目は感情を生み出しているのである。シュタイナーはゲーテの色彩論を高く評価する。

感情作用の特徴は反感と好感の共存である。人間以外の動物も感情の中に住んでいる。しかし動物の感情は人間の感情とは違う。動物は人間よりもはるかに強く好感の中で生きている。動物が環境世界に好感を抱いているということは、動物が環境世界に依存していて独立できないことと同義である。人間の感情を特徴づける反感は、人間が独立した存在（*Persönlichkeit*）になることを可能とする。この反感は意識に上り難いけれども、人間は反感の作用によって自分が個的存在であることの意識（*Persönlichkeitsbewußtsein*）に至るのである。

好感は人間でも動物でも意志作用と一体である。人間も何かを意志するときは常に、意志されるものに好感を抱いている。しかし意志されるものはすぐに思考作用によって反感と出会うのである。そのため一種の均衡が生じて好感が意識されることはない。好感が意識されるときは、意志が思考作用より強力であるとき、すなわち、感激や熱中や愛情から人が行為するときである。

反感と好感は人間の行為に必要な不可欠な力である。そしてその適正な均衡は教育の課題である。例えば、子どもは「純粋な好感のみから行動する」（100）。活動し騒ぎまわる子どもの行為は強い好感（意志や感情）の現れなのであるが、そうした好感は表象（認識）作用の反感によって浸されることも大切である。

それは倫理的感覚の成長にも大切である。「私達が幼い子どもの中に見ることのできる諸々の衝動が、もしも子どもにとって気持ちのよい（*sympathisch*）ままの形で、一生を通して気持ちよくあり続けるならば、人間は本能の支配下にとどまって動物的に成長していくでありましょう。これら本能は、私達人間にとって反感を覚えるものにならなければなりません。だから私達は、本能の中へ反感を注ぎ込まなければなりません。私達が本能の中へ反感を注ぎ込むとき、私達はそれを倫理的理念（理想）を用いてするのであります。倫理的理念に対して本能は反感的（*antipathisch*）であり、この倫理的理念が、とりあえず誕生から死までの期間にある私達の生において、子どもの持つ本能の好感の中へ反感を注ぎ込むのであります。それ故に倫理的成長とは、常に禁欲的なものなのであります。……禁欲とは、常に動物的なものと戦う修練なのであります。」（100）

さて、人間の心性において一番身近であるのは感情である。地上に生きる人間にあっては純粋思考と純粋意志は理解することが困難である。感情の中で思考的要素と意志的要素は浸透し、人間は両極の作用を窺い知ることができる。感情によって人間は自分が一つの総合体（有機的存在）であることを体験できているのである。次の文章の内容はすでに見たことと重複する。「ちょうど中間にある境界線（感情）から見て一方の側では好感が流出している。すなわち意



志の領域である。だが意志の有する好感は思考の中へも入り込み、思考の持つ反感は意志の中へも入り込んでいる。そしてこのように一方の側で主流を占めているものが他方へも作用を及ぼすという営みによって、人間は一つの総合体となるのであります。」(101)

「感情は両者の中間に立つ心性作用として認識と意志の中央に位置し、その性質(Wesenheit)を両方の方向に向けて放射しているのです。」(105) また、感情とは「認識の『まだ完全にはなり切っていないもの』」であり、同時に、意志の『まだ完全にはなり切っていないもの』(105)なのである。

ゲーテの色彩論は感覚作用における感情の発生を鋭く見抜いたものである。逆に、プレントナーとジグワルトの「判断」をめぐる不毛な論争は、判断と感情作用の関係を適切に見抜けないためである。

感情が肉体において生じる場所は、すでに見たように骨格・神経組織と筋肉・血液組織が接触するところである。「目」については見てきた。目では感情作用は抑圧されて意識に上がることがない。しかし「耳」では感情作用ははるかに強い。耳では認識と感情を区別することは困難である。シュタイナーの「感覚」理解については後に見るが、彼によれば心理学が目と耳の感覚作用の違いを区別しないで、ひとまとめに「感覚」として処理していることは批判しなければならない。

また、人間の心性における感情作用のあり方が理解されるならば、カント派が主張する「認識」の誤りも明白となる。カント派は世界はまず観察すべきものとしてあることを前提とし、認識は最初から完成して人間に与えられているとみなしているのである。

## VI

これまでは人間存在の三重構造を心性の視点から理解しようとしてきたが、霊性の視点から見るとどうであろうか。この新しい視点で明らかとなるのは人間の意識の覚醒の段階である。

霊性の視点から見ると、人間は思考的活動(認識的活動)を行うとき、言うならば「光の中」にある。思考(認識)という作業が進行している世界は明るい。そこには「完全に意識化された行為」があり、この完全に意識化された行為の中に「自我」は「ある」。例えば、「この人間はよい人間だ」と考えている過程では、主語である「この人間は」と述語である「よい人間だ」は、共に隅から隅まで意識の光によって照らし出されている。思考的認識行為では意識は完全な「覚醒状態」にある。

一方、人間が意志するときは、「その行為の中には常に深く無意識的なものが混じり込んでいる。」(115) 例えば歩行である。歩行の際に筋肉の内では生じていることは全く意識されていない。体験しているはずのことが意識に上らない。歩行の際に意識されるのは、歩行についても表象の領域にあるもののみである。このように、意志における意識のあり方は「睡眠的」である。

感情についての意識のあり方を問うならば、感情は思考作用と意志作用の中間にあるというその位置から、両者の性格を共に持っていることが明らかとなる。感情は覚醒と睡眠の中間であり、そこでの意識は「夢見的」である。

以上のことは次のようにも言える。人間が覚醒しているのは認識的な思考作用の中にいるときであり、熟睡しているのは意志的活動の中にいるときである。また、感情の中では夢見的である。「人間は思考し認識する人間としては、覚醒した人間であり、意志する人間としては眠っている人間であり、感じている人間としては夢見をしている人間です。」(118)

注目しないといけなは熟睡している人間の存在である。人間は「意志する存在である限り、目覚めている間も眠っている」(117)というあり方をしてい。意志の内部にある本質的

なもの、前に見たところの死後に実現するものの種子は眠っているのであり、人間は自分と共にもう一人の眠っている人間を身につけているのである。

そしてさらに、我を忘れる熱中状態も人間の睡眠状態であることが理解されなければならない。「霊性の見地から見れば、夢見をしない睡眠（熟睡）は、人間が昼間の仕事の中で意志のおもむくままに全的に自分の心性を注ぎ尽くしている没入（Hingabe）と同じであります。それとこれとの違いは、本当の熟睡では心性活動の全体が眠っていますが、覚醒時では意志作用のみが眠っているという点であります。」（118）

霊性の視点からの人間理解は教育における子どもの理解に生かすことができる。子ども時代というのは思考作用が十分に目覚めていない。その分だけ感情作用が優勢であり、夢見がらの生活を生きている。子どもは夢想的なものに引きつけられやすいのである。また、感情作用の目覚めさえ充分ではないような子ども（ある種の障害児）は、特に意志作用が優れているのである。意志作用が強いために目覚めながら眠っている。そのような子には認識能力に働きかけるのではなく、意志に働きかけることが大切となる。例えば、「話す」とき同時に「歩く」と良い。「ひとは（一步）みんな（一步）しんせつ（一步）です（一步）」（121）というように。

さて、人間の中核とされている「自我」と三つの意識状態の関係を見てみよう。

自我は人類の進化が生んだ最も新しい産物である。そのためにまだ弱く、人間の周囲で人間を取りまいている諸力（諸霊）から保護されないといけな。自我は現実の世界に現れるのではなく、この世界を映す像（表象、認識）の中に現れる。「現在の人間が誕生から死に至るまでの間に完全に目覚めた自我を持って生きているのは、宇宙の像の中なのであって、宇宙そのものの中ではないのです。」（123）「自我は目覚めに際して肉体の中に入ると、思考的認識作用の中に住むのです。そこでは自我は完全に目覚めていますが、自我はただ諸々の像を相手に生きているにすぎません。」（125）

一方、感情作用における自我は単なる像の中に生きるのではない。肉体の中に入っている。肉体の中でのこの自我は朦朧とした意識しか体験することができない。感情作用での自我は夢見をしている自我である。「インスピレーション」とか「直観的表象」と呼ばれるものは、感情作用に生きる自我の一時的な覚醒である。それは意識下の生にあるものを完全な意識にまでもたらしめてくれるものである。

また、意志作用における自我は深く熟睡しているために、意識化されることは難しい。非常に鈍化された、言うならば正体不明の体験として無意識的に直覚されるのである。

肉体における自我のあり方を図式的に説明するならば、自我という円は三分割することができる。覚醒している自我、夢見の自我、熟睡している自我である。そしてそれらの間には次の関係を指摘することができる。まず覚醒している自我から夢見の自我への変化である。これは思考的認識的生活を生きている自我が次第に感情的生活を生きる自我へ変容していくことである。「肉体内への下降」である。次は覚醒している自我へ上昇する道であるが、この道は前者の逆ではない。シュタイナーによれば、覚醒した認識活動に到る道は感情作用よりも意志作用の方がより近いのである。（シュタイナーは子どもの教育や授業をする際に、思考的活動ではなく感情作用や意志作用を活性化することの重要性を繰り返すのであるが、それは感情作用、さらには意志作用の方が思考活動をより強く刺激すると理解しているためである）。この関係は、後に見るように人間の肉体的構造と一致する。

## VII

心性からの視点で人間を理解するときには手がかりとなったのは反感と好感であった。霊性からの視点で人間を理解するときには覚醒、夢見、熟睡の三つの意識状態が大切である。次には

霊性と肉体を関係づけて理解することが必要となるが、その前に、そのための一つの方法として子どもと老人における心性の違いを指摘しておきたい。

子どもでは意志と感情が一体となっていて思考は未発達である。一方、老人では思考と感情が一体となっていて或る程度の独立性を持つのは意志である。すなわち人間の心性を代表する感情は最初は意志と結合しているが、次第に意志から離れて思考と結合する。この結合の変容は心性のたどる発展過程に他ならない。「子どもにおいて見られる感じつつ意志するあり方が、老人の感じつつ考えるあり方に成熟するのです。」(138)

この文脈で言うならば、子どもの教育は意志から感情を解放する作業と関係する。子どもの感情作用が意志作用から円滑に解放されると、解放された感情は思想的認識作用と結合することに成功するのである。

さて、感情の一つの表現形式である「感受作用」(Fühlen)を取り上げてみよう。感受作用とは人間が世界を観察する際に現れるものである。感覚が外界と関係を持つとき、外界を感受する作用である。

心理学は感受作用を次のように説明する。例えば聴覚とは、空気の振動という物理的現象が引き金となって引き起こされる或る種の質的内容の発生を感受する感覚であると。しかしそうした説明では、どうして他ならぬそのような質的内容を感受するかは不明のままである。この不明さの根本は、心理学が感受作用を認識作用とみなしていることである。一見する限りではそのようであるのだが、事実は違う。前にも見たように、シュタイナーによれば「感受作用とは感情的性質を混入した意志作用の性質を持つもの」(140)なのである。視覚とは目から触手が伸びていってものを捉える作用なのであった。聴覚も同じである。

感受作用が感情的、意志的性質のものであるということは、これを霊性の視点から見ると、感受作用は夢見的、熟睡的であるということである。感受作用が働いている人間の肉体の部分、例えば肉体の表面は、半ば夢を見ている状態であり半ば眠っている状態にある。別の言い方をすれば、感受作用とは睡眠している肉体表面の中に入り込んでくる、そして悟性や思想的認識によって捉えられるより以前の、感覚器官に生じる「夢」である。だから人間は感受作用を残りなく見透すことはできない。

その感受作用も子どもと老人とでは違う。「感受作用もまた生きており、人生の過程のうちで成長をとげ、子どものころは意志的性格を強く持っていたのが老人になると悟性的知的性格を強く持つようになるのです。」(144-145)子どもの感受作用では感覚器官の夢見的睡眠の状態はより深いのである。そのために子どもの教育は、知的教育をする場合でも常に感情作用や意志作用に対しての働きかけを続けたいといけないのである。

さて、人間の肉体を空間的視点から見てその霊性のあり方を問うと次のようである。まず肉体の外周(周縁部)は夢見的睡眠の状態である。また肉体の内部も同様である。人間は筋肉や血液の内部で生じていることを意識することはできない。人間が完全覚醒の状態にあるのは思想的認識作用の中にあるときであるが、この作用を営む神経機構はどこにあるかと言えば、外周と内部の中間領域にあるのである。「人間は、霊性という視点から見れば、誕生から死までの期間においては、身体の表面と内部器官との中では眠っており、完全に目覚めていることができるのは、その中間の部分だけなのです。」(147)

付言すれば神経組織は霊性と特殊な関係にある。神経組織は肉体の内部で絶えず死滅化しようとしている組織である。そのため神経組織は霊的なものに無縁であることができる。言うならば神経組織は霊性の働きに対して人間を虚の状態とするのである。そのようなことができる他の肉体組織はない。霊的な意味では神経の占めている場所は空虚である。しかしそのおかげで思想的認識的な作用はほしいままの自己展開が可能となるのである。神経の働く場が空虚で

あることによって、人間は外界に存在するもの、外界に生起することと共に生きることができ  
る。「ここでは皆さんは光や色そのものと共に生きているのであります。」(150)「ここでは皆  
さん自身が光となります。音となります。」(151)

人間の肉体を空間的に見る視点から、人間存在を時間的に見る視点へと視点を切り変えると、  
いかなることが明らかになるであろうか。「想起」と「忘却」である。前者は目覚めであり後  
者は睡眠である。

## Ⅷ

想起はどうして生じるのか。シュタイナーによれば、想起が生じるのは、人間がその中では  
熟睡しているあの意志が、意識下の表象の一つに掴みかかり、これを意識の中へ引き上げるた  
めである。「想起現象によって引き起こされるものは、眠れる意志の力に由来するのです。」(156)

想起と忘却は眠れる意志作用によるところの意識の覚醒と睡眠であって、想起（記憶）が大  
切であると同様に忘却も大切である。忘却がないと意識は過剰の内容を取り込んでその緊張の  
ために正常に機能できなくなる。しかし現実的には、非常に多くの人には生涯を夢うつつの状態  
で過ごしているのであり、想起よりも忘却の方がより強い生を営んでいる。人々は外的世界に  
向かって正しく身を処することをしない。そしてまた内部においては勝手気ままに浮かび上  
がってくる表象を、生じるままに放置している。大人達もそうであるが、子どもにおいては夢  
見の状態はさらに深いのである。

教育的に考えるならば、想起と忘却を次第に随意性の領域に移すことが大切である。教師が  
子どもを教育する際には、熟睡している意志のことを考えなければならない。教師は、子ども  
がこの意志を行使しなければならないような働きかけをしてはならない。熟睡している意志が  
少しずつ目覚めていくように働きかけるのである。それは個々の場合に即して、意志が活性化  
するような生活習慣（「心性的身体的靈性的生活習慣」157）を形成することに他ならない。

例えば動物界に対して、「興味は少しずつ少しずつ目覚め、増大していくように」（157）授  
業の全体を構成していくのである。私達は「エポック授業」を想起することができる。そうい  
う授業によって興味が活発に目覚めれば、その授業は子どもの意志に向かって働きかけている  
ことになるのである。一時間の授業で文化財の一単位を知的に伝授することが課題なのではな  
くて、子どもの生活習慣を形成するという教育の全体的枠組みの中で、子どもの意志を活性化  
することが大切なのである。（意志が活性化されて正しい秩序の中にあることが大切なのは、  
それによって子どもの想起する力が強化されるためである。興味を引くものは想起が容易であ  
るが、興味とは眠っていた意志が活性化して目覚め、感情の好感作用が優勢となった状態な  
のである。）教師は子どもの想起（記憶）を感情作用と意志作用の問題として考えなければなら  
ない。「記憶力というものは感情と意志の側から強化していくべきものであって、絶対に単な  
る知的記憶訓練によって強化しようとしてはならないものであります。」(158)

さて、シュタイナーによれば人間は12個の感覚を持っている。それらの諸感覚は大別すると  
三種類になる。これは心性の三つの働きと対応しているためである。以下に列挙する感覚はそ  
れぞれが独立して作用するのではなく、全てが相互に浸透しあっている。

「触覚」、「生命感覚」、「運動感覚」、「平衡感覚」。この四つの感覚には意志作用が強く浸透  
している。そのため「意志感覚」と呼んでよい。意志感覚は意志作用がそうであったように、  
その感覚の働きは人間に意識されない。そのような感覚があることさえ不明瞭である。人間は  
意志感覚の働きについては眠りのうちにあってそれに気付くことはない。

「嗅覚」、「味覚」、「視覚」、「温感覚」。この四つの感覚は感情作用との結びつきが強い。「感  
情感覚」と呼んでもよいものである。

「聴覚」、「言語感覚」、「思想感知感覚」、「自我感知感覚」。この四つの感覚は「認識感覚」である。すでに見てきたように、感覚の基本は意志作用であった。認識作用と対応する感覚があると言うのでは矛盾することになる。しかしシュタイナーによれば、「認識感覚」での意志は眠れる意志の状態にあって、何かの認識行為が行われると共鳴して自己表現するという性格の意志なのである。

見られない感覚についてももう少し説明しよう。「自我感知感覚」とは、「私」の内部にある私自身の自我を感知する感覚ではない。私以外の人を一個の自我であると認識する感覚である。自分の自我は意志作用によって体験されるのであって、他人の自我の感知とは異なる。後者は一種の認識作用なのである。それと言うのも自我感知感覚の器官は、睡眠状態にある意志作用の中で他人の自我を探知するからである。そしてこの探知作業はすぐに認識作用に伝達されるのである。

「思想感知感覚」とは自分以外の人の思考の内容を感知する感覚である。「言語感覚」と混同されやすいのであるが、言語感覚は音声言語のための、音声感覚の中で働くものを捉える感覚である。それに対して「思想感知感覚」は音声言語に限定しないで空間的形態に内在する思想をも感知する感覚である。

「視覚」は色彩を捉える感覚である。形態（線）は視覚には色彩と色彩の境界であるにすぎない。形態（線）を捉えるのは意識下における意志作用、すなわち「運動感覚」の働きによるのである。無意識のうちに或る運動を行い、その結果が認識作用へ浮かび上がることで形態（線）が感覚されるのである。

こうした12個（三種類）の感覚から生じる要素を一つにまとめて組み立てるのが「判断」である。この判断を下すものが「自我」である。自我は各感覚が持ち込むものを一つにする。例えば色のついた物体を見るときには、色彩を捉える感覚と形態を捉える感覚とは一つに統合されるのであるが、そのように、自我は内的に強制されているのである。そのさいの諸感覚の間の結びつきはいかに多様な組み合わせがあろうとも、である。

## IX

教育の対象となる年代は人生の最初の約20年であるがシュタイナーはこれを三期に分けて考える。第一期、交歯期（7才頃）までの子ども。この年代の子どもの本性は「模倣」である。第二期、公歯期から性的成熟（14才頃）に到るまでの子ども。この年代の子どもの本性は「権威に支えられた」学習である。第三期、性的成熟の時期にある子ども。この年代の子どもは自分の判断から自主的、自律的な行動をすることができるようになる。

例えば小学校年齢の子どもの教育では、子どもが「権威あるものを求めている」ことを忘れてはならない。しかしその際教師は、自分の論理を表面に出すのではなく、自分の態度全体から滲み出るものによって子どもの求めに応じるのである。

ところで、学校教育の課題の一つは論理的思考力を強化することだと考えられている。しかし「論理」とは何であろうか。シュタイナーによれば思考的認識的な活動に生きる論理には三つの要素がある。「結論」、「判断」、「概念」である。

人間がする最初の行為は「結論」である。例えば動物園に出向いてAに会うとする。Aを見て「ライオン！」と意識するのは結論づけをしているのである。結論を作る行為は人間にとって最も意識的な行為である。

この「結論」について、「これは期待していたとおりのものだとか、少し違う」というのは「判断」である。そうして作り上げられた判断から一つの「概念」（「ライオン」）が成立する。総合的な人生体験の中では、論理的活動は結論→判断→概念と進む。

ところが学校教育で扱われている論理は、例えば形式論理学の三段論法のように、人生体験では一つのを分断し、分断されて死んだ命題を積み重ねようとしている。そこでは概念から出発するのである。しかしこれは批判されなければならない。

霊性の視点から見れば、論理の三要素は以下のようである。まず、結論が完全に覚醒した意識状態において成立する。その限りで結論は健康であることができる。完全に覚醒した状態ではない意識における結論は不健康である。次に判断は、最初は結論と同じで覚醒した意識状態で成立する。しかし判断はさらに心性の深層へと降りていく。すなわち心性が夢見の状態であるところへ降りていく。(結論はこの下降が絶対にできない。)心性が夢見であるところとは感情である。この感情の中で保持されているものが判断である。そのため判断する行為は「習慣」となりやすい。

概念は判断よりさらに深く降りていく。概念は熟睡している心性の中にまで降りるのである。ところでこの熟睡している心性は、後に見るように肉体に働きかけるところの心性なのである。(覚醒している心性が肉体に働きかけることはない。)概念を形成するという事は、人間の肉体にまで作用を送り込むことである。確かに肉体は遺伝によって形体の大枠を定められている。しかし概念形成は肉体の形姿をさらに繊細に決定するのである。例えば「表情(顔つき)」は、それまでの時期に注入された諸概念の結果である。(シュタイナーによれば今日、個性的な相貌の人間が少なくなってきたのは、時代の文化が画一的な概念の形成をしているためである。)

要約しよう。「概念は無意識下でしか生きることができない。判断は、判断習慣という形での半意識的な夢見の生の中でしか生きることができない。結論は本来、覚醒した完全な意識状態にある生の中でしか働くことができない。」(182)

教育の場では、結論に関することは子どもと話し合うだけにし、固定した結論をおぼえさせない配慮が大切である。子どもの内部に入れてやるのは、後に概念に熟するものだけである。その概念は子供の成長と共に変化していく「生命のある概念」(183)である。(子供の成長とは無縁で、成長した後もかつて与えられたときと同じ姿である死んだ概念を与えるのではない。)

「生命のある概念」を与えるには、定義づけをするのではなく、性格づけをするようにするのが良い。すなわち事物をできるだけ多くの視点から照明してやるのである。これは授業する際の必要条件である。

また、教師は変化する概念と変化させる必要のない概念とを区別することが大切である。変化させる必要のない概念とは「人間の理念」に関するもので、子どもの「心性の骨格」(185)となるものである。例えば畏敬や尊崇の念の理解、また「祈りの気持」の理解などである。人間の理念に関するそれらの概念は、同時に生命のある概念であることが多い。

さて、この章の最初に、大人になるまでの時期を三分したが、別の観点から各時期を特徴づけておきたい。交歯期に至るまでの第一期の子どもの根本衝動は、「世界は倫理的なものである」(187)というものである。根本衝動とは無意識のままにする傾向性である。幼い子供のすばらしさと偉大さは、子どもが世界の倫理性を信じていることである。この時期の子どもは「世界に対する帰依の態度」(187)に満たされており、世界は模倣するに足るものだと確信している。その理由はこの時期の子どもが、誕生前の霊の世界に生きていた時の生を引き続いて生きているためである。

交歯期から思春期までの第二期の子どもは、現在ある世界の中に生き、その世界に興味を抱く。教師は授業が楽しみとなるように配慮しないといけない。しかし低俗なものや常識性に墮落してはいけない。功利的な観点からの「実物教育」も好ましくない。それらから脱却する方

途は、この時期の授業を芸術的なものにするのである。教師自身が芸術の中に生きるよう努めることで、「世界は美しい」(189)というこの時期の子どもの確信にゆだねなければならない。

性の成熟から始まる第三期に至って、ようやく子どもは「世界は真理である」(190)という事実を見出すことができるようになる。授業はこの期から学問的な性格を持ってよい。子どもは真理を内側から把握できる力を持つようになってきているためである。

## X

人間の「肉体」の外形について考察しよう。肉体は本質的に三つの部分から構成される。頭部、胸部、そして下腹部を含む四肢部である。

「頭部」は球形であるが、この形は頭部が物質界において一つの完成体であることを示している。頭部は自分の本性を隠すことなく全部見せてくれている。頭部は完全に肉体になりきっているのである。

「胸部」の形は三日月である。この形は胸部のかなりの部分は隠されていることを示している。見える肉体の部分は大きな球体の一部分である。すなわち胸部にはその前面に向かって見えない大きな部分、肉体にはなっていない心性の大きな部分があるのである。

「四肢部」の形は、ある大きな球形の中から、胸部の場合とは違う別の部分が可視的部分として残ったものである。胸部の場合は球の外縁の一部が三日月に残ったのであるが、四肢の場合は、球内部にある球半径の一部が残ったのである。四肢は球内部の一部分であり、それが胸部に挿入されているのである。

肉体の三つの部分の単純な図式的理解は本質を明らかにしない。頭部も四肢部を持つ。それは頭蓋骨にある上顎骨と下顎骨である。この四肢部は本来の四肢部とは違って筋肉・血液組織がない。そのため頭部では思考的認識作用が中心となっている。一方、四肢部も頭部を持つ。しかしこの頭部は肉体とはなっていない。この頭部は霊界に生きているためである。

シュタイナーはゲーテの「頭蓋骨脊柱説」をさらに進めて、頭骨と四肢にある円筒状骨が「裏返し」の関係にあると言う。そして人間の肉体では頭部と四肢部が「裏返し」であって、対照的な作用を演じあう関係にあるとする。例えば、四肢部の見えない頭部は、霊界からの意志を四肢を通じて頭部に伝える。肉体となっている人間の頭部は思考的認識作用によってこれに応じる。意志と認識作用は胸部で出会い、そこに感情が生まれるとするのである。

人間の四肢は突出するようになってきたのではなく、霊界に生きるものの意志によって胸部に挿入されてきたのである。目に見える四肢部は、本来の四肢部である巨大な球（宇宙）の一部分の、しかもその末端部分が凝縮度を高めて可視化したものなのである。そのために四肢部は宇宙の霊的要素がその肉体の中で強く作用している。

人間と宇宙の関係は胸部と下腹部の接する場所に端的に現れている。肋骨は頭部に近いほど閉鎖し下に行くほど開いている。これは人間の肉体の外側から四肢に流れ込む力が頭部からくる抑制と出会った結果である。

人間存在は三重の球の統一体で考えることができる。「人間はまず第一におそろしく巨大な球であり、その球は全宇宙を包攝します。同時にまた中位の球でもあり、また小さな球でもあります。最小の球だけが完全に目に見えます。中位の球は一部分だけが目に見えます。最大の球はその放射線の先端だけが目に見え、その他の部分は見えません。このようにして人間は宇宙の中からその形姿を得たのです。」(198)

頭部の機能で生きる「頭部人間」から四肢の運動を見ると、それはさながら、列車の車窓に展開する風景である。「四肢人間」が運動や行動によって世界の中で為し遂げていくものを、頭部人間は静止させようとする。静止した状態（表象）で処理していくのである。

では、人間が四肢を通じて宇宙にある動きを受容し、模倣するときには何が生まれるのであろうか。「踊り」である。舞踊の真実の姿は、四肢人間が中心となって宇宙の運動を模倣することである。一方「外側に向かう舞踊的な運動は、内側に向かっては歌あるいは音楽に化します。」(201) 四肢の運動が胸部に伝えられ、胸部の心性を活性化して成立するのが音楽である。さらに付言するならば「色彩」は静止に達した運動である。このように諸々の感受作用の起源は、四肢部を通しての意志作用が、四肢の運動に参加しない頭部によって胸部に照らし返されることにある。

頭部人間は単に肉体である。胸部人間は肉体であると同時に心性である。ところが四肢人間は肉体であり心性であり、さらに霊性なのである。前に見たように、人間存在は三重構造において理解されなければならない。ところがこの理解は社会的に成立しないまま今日に到っている。例えば或るところでは四肢人間を知ることが禁じられ、また或るところでは霊性との関係が断ち切られている。その結果として人間は自我性の中に追いつまれ、自然科学的物質主義の虜となっている。このことは生理学や心理学、教育学でも同じである。

シュタイナーは教師が世界の諸々の事実を根底から理解しようとする姿勢を持つことが大切だと繰り返している。事実を根底から理解するためには宇宙論を避けることはできない。人間の形体に顕現している宇宙との関係を見るならば、自然のうちに畏敬の念が生じるであろう。この感情は、子どもをつまるところは小さな動物とみなして、この動物を少しばかり先に進ませようという意識に対抗するものとなる。だからその感情が教師の行う授業の個々の作業の総てに浸み込んでいくなれば、その感情は授業を神聖なものにしていくはずである。

「人間と宇宙についてのこのような感情を持たなければ、私達には真剣に正しく授業を行うことはできないのです。」(207) そうした感情は、それを持った瞬間に子ども達に伝達される。それはちょうど地中に埋めた銅板の間を電流が流れていくかのようなようである。教育学はこのような感情の上に築かれなければならないのである。

## XI

人間の肉体の本性を霊性と心性から概観することを続けたい。先には頭部が肉体として完成していることを強調した。しかし頭部は胸部や四肢部の場合とは「違った意味で」心性的であり、霊性的なのである。これは頭部の心性や霊性が覚醒していないということを指摘しようとするものである。

例えば、第一成長期の子どもでは、頭部心性は夢見の状態であり、頭部霊性は熟睡状態である。この期の子どもの本性が「模倣」であるのは、頭部霊性が眠っているおかげである。この期の子どもは自分のもとにいないで周囲の人のところにいる。周囲の人と一つになって生きているためである。一方、頭部の肉体性は誕生時にすでにほとんど完成していて覚醒状態にある。しかしこれの最終的完成には今しばらくの成長が必要である。最終的完成は「交歯期」への到達が目じるしである。

第一成長期の子ども胸部では頭部よりも覚醒の度合いが高く、霊性のみが夢見的状态である。胸部は誕生時から肉体的性格と心性的性格とを持っている。

また、第一成長期の四肢は、誕生時から肉体と心性と霊性は密接に結ばれ、相互に浸透し合っている。四肢は早くから覚醒状態にある。ただ、完全な覚醒状態にはあるものの、総ては未完成であり未成熟である。

要約しよう。「人間の頭部霊性は人間が生まれて来るときすでに非常に高度に完成しているが、しかし眠っております。人間の頭部心性は、人間が生まれて来るとき相当の程度に発達しているが、まだ夢見つつあります。これらは次第に目覚めて行かねばなりません。四肢人間と



して見た場合の人間は、生まれて来るときにすでに覚醒していますが、しかし未だ未完成であり未発達なのであります。」(212-213)

教育や授業の課題となるのは、発達させる必要があるものを援助することである。そのものとは四肢人間と、そして胸部人間の一部に限られる。頭部人間は四肢人間と胸部人間が目覚めさせていくからである。

第一成長期、第二成長期の子どもに対する教育は知性を中心としてはならない。これはシュタイナーが繰り返し強調することである。「私達が教育によって行いうる最上のことは意志教育であり、また感性教育の一部分であります。」(214) そのために教師には「善良さ」が要求される。教師は知性的であることより以上に善良であることが大切となる。「……私達がはっきりと自覚していなければならないと思われますのは、知的なものに関しては育ち行く人間にあらゆる点で勝っている必要はないに致しましても、善良であると言う点については……意志の発達に関連する事柄でありますから、できるだけ力をふりしぼって可能な限り努力しなければならないのであります。」(214)

意志を通しての働きかけによって頭部の眠れる霊性が目覚めるようにするのであるが、新生児では四肢から頭部への流れがまだ生じていない。両者のかけ橋の役割をはたすのは人間の外に住む霊性(「自然の守護霊」217)である。この霊性が四肢人間に生み出させた物質が「母乳」である。母乳は眠っている霊性を目覚めさせるのである。

このように人間の成長の最初は自然の守護霊が配慮してくれている。教師の仕事はその引き継ぎである。子どもはすでにならぬものを持ってきているのである。特に頭部はこの世で成るべきものを誕生時にすでに持ち込んでいるのである。教師は頭部に住むものを目覚めさせることができるのみで、その中に何かを押し込むことはできない。頭部にはそう多くのことを期待することはできないのである。

しかし、人間の文化の発展過程で外的な慣習として蓄積されてきたものについては事情は別である。それは霊の世界とは本来的に無縁である。例えば言語、そして読書や作文という文化的慣習は教えないといけない。しかしその教育も頭部に注入するのではなく、胸部や四肢を通して覚えさせるようにすることが大切である。芸術的授業が良いのはそれをするためである。「読み書きの授業は、正しい授業方法によろうとするなら、芸術の側からしか行ってはならないのです。」(220) 読み書きの授業に先行して、図形描写と色彩表現の初歩的要素(「フォルメン」)を訓練すると良い。このような授業は子どもを苦しめることがないからである。

「正しい方法は、できる限り意志によって知性を目覚めさせることなのです。これは、芸術的なものから知性的なものへ移行して行って始めてできることであります。」(220)

教師が子供の成長している事実を正しく理解するためには、各成長期の基本的な発展過程を知らなければならない。そして自分の活動が子どもの成長を妨げないように配慮しないといけない。例えば第二成長期の子どもに、教師が「記憶」を過大に要求すると、或る限度内ではあるが子どもを細長く上に伸びる存在にしてしまう。一方、「ファンタジー」に過大な要求をすると、成長を抑えつけてしまうのである。記憶とファンタジー、思考的認知的活動と意志活動の間に均衡が生じないといけない。

子どもの成長の事実を理解するためには、一人の教師が相等の期間を通して子どもを受け持つのが良い。「子どもを毎年違う教師の手にまかせるとい制度は、実に気狂いじみたものと言わねばなりません。」(223) 子どもの事実は少しずつ明らかになるからである。(第二成長期の八年間を一人の教師が担任するのである。)

XII

肉体の観点から人間を考察しよう。これは人間と物質界との関係を考えるということである。人間の肉体は頭部と胸部と四肢部に分けられた。物質界すなわち物質的・感覚的な環境世界は鉱物と植物と動物に分けられる。

頭部は四肢部から伝えられる運動を静止状態に化する。このことについては前に見た。頭部のこの作用は車窓に移り変わる風景をながめている人の立場でなされるものである。この作用が表象活動に他ならない。「頭部は常に、形を生み、姿を作り出します。」(227)しかし注目すべきであるのは、この姿勢は総て、外界である物質界の中に「動物」の形態を取って実現されている、ということである。端的に言えば頭部はその時々、人間を狼のような外形や、羊のような外形や、虫けらのような外形にしようとしているのである。しかし人間はそのまま動物になり切ってしまうのではない。それは胸部組織と四肢組織の作用が頭部の作用に対抗することのおかげである。

人間の内部では諸々の形態の動物が生み出されて活動し、そして分解されている。これが「思念」である。思念は単なる感覚ではない。思念には感覚に現れないもの、超感覚的な世界に生きるものが現れている。「思考過程」と呼ばれる思念の流れは、人間の頭部が作り出す動物界が、感覚世界の現実にまでは到らないで、超感覚的世界の中にとどめ置かれた状態のものなのである。

そのようなことができるのは、人間の頭部を代表する「脳・神経組織」が、人間以外の動物が発達させた形態を逸脱しているためである。人間の脳・神経組織は、言うならば動物界を通り抜けているのである。

一方、人間の胸部は物質界の「植物」と関係している。胸部組織の中心は「血液循環」と「呼吸および栄養摂取」である。これらの活動は植物が営んでいる活動に他ならない。人間の胸部と植物界は特殊な相互関係にある。

特殊な相互関係とは「裏返し」の関係である。植物の呼吸と人間の呼吸は裏返しの関係にある。「胸・胴部組織に関して言うならば、人間は植物界と裏返しの世界を創り出しています。」(232)事実としての胸部は裏返しの活動ではなくて、植物と同じ活動をする能力を持っている。胸部は人間の体内に植物世界を生じさせようとしているのである。しかしそうならないのは、頭部と四肢部が抵抗し妨害するためである。それでもなお人間の内部に植物世界が生じると、それは内科的疾患となる。

胸・胴部組織では呼吸作用と共に、この作用とも関連して一種の燃焼過程が営まれている。食物摂取の活動である。しかし人間の内部で生じている燃焼過程であるところの食物摂取は、本当の燃焼過程ではない。人間における燃焼過程は始めと終わりが欠けており、「ただ中間部分のみ」(235)からなるのである。燃焼過程の始めとは、例えば果物が熟し始める過程であり、燃焼過程の終わりとは腐敗する過程である。物質界という外的世界で進行している生起の中間部分のみが、人間の体内では進行している。

シュタイナーによれば、人間の呼吸が反植物界であり、人間の食物摂取が外界の生起の中間部分であるというこの二つのことが、胸部において共に成立しているということから、心性と肉体とは胸部において「手をつなぎ合う」ことができるのである。「心性とは反植物作用のことであり、人間の性格を付与された肉体とは自然現象の中間部分のことなのであります。」(236)未来の医学や衛生学は、心性と化した呼吸作用と、肉体と化した自然の燃焼過程の中間部分との関係を解明することを課題とするはずなのである。

さて、人間の四肢部は物質界といかなる関係にあるのか。四肢部の中心は「筋肉・骨格組織」である。シュタイナーによれば、四肢組織は「鉱物界」と関係している。その関係の仕方は、

諸々の鉱物が人間の肉体の中で鉱物に固有の結晶形体となることを妨げるというものである。四肢組織は「大地の鉱物形成作用に対抗する性質」(240)を持っている。四肢組織の働きが充分でないと糖尿病のような病気になるのである。

四肢組織がそれに本質的な機能を営むことができるのは「自我」のおかげである。自我は力(「力体」239)の中に生きてるとシュタイナーは言う。自我は目に見える肉体の中に住んでいるのではない。肉体はただ着用している衣服にすぎない。「皆さんがお立ちになるとき、足が大地を押すその力の中に皆さんは住んでおられるのであります。」(239)「自我は行為の内に働いている力の中に住んでいます。」(239)

自我の作用は人間が鉱物化することに対する抵抗である。

### XIII

人間が外界に対してとる態度は二通りある。四肢人間の態度と頭部人間の態度である。二つの態度は対立的な性格のものである。

四肢人間の形態と頭部人間の形態は裏返しの関係にあった。図式的に言うならば頭部は圧力が内から外に向かい、ふくらむことででき上がるのに対し、四肢は圧力が外から内に向かっていく。圧力は額のところで逆向きになるのである。

「皆さんが手のひらで外界を受けとめ足の裏で大地を踏むとき、手のひらや足の裏を通して外側から流れ込んだものは、内側から額を圧迫するものと同じものです。」(243)これは人間の内部における霊的心的なものの作用する方向を示している。霊的心的なものは「一種の流れ」(243)に他ならない。流れの姿をとって人間の中を通過していくのである。

この霊的心的なものの流れに対して、人間は堰堤として存在する。「人間は霊的心的なものを堰きとめる道具なのです。」(244)霊的心的なものは本来流れ抜きたいのであるが、人間はそうさせないで流れを制御しているのである。

ところで、霊的心的なものは人間の肉体に対して破壊的な作用をするものであるために、流れを堰きとめる肉体は常に消費されていくのである。そのために肉体は常に自分自身を作り続けていないといけぬ。霊的心的なものの破壊作用に対抗して、人間を物質で満たしていくのは胸部・腹部組織である。

この胸部・腹部組織に挿入されているのが人間の四肢組織であった。四肢組織では肉体の形成はほとんど生じない。四肢の運動はひたすら肉体を食いつぶすのみである。すなわち四肢組織は人間において最も霊的なものである。しかし四肢の運動は必要である。適当な運動によって肉体が消費されないと、肉体は内部に過剰な物質を蓄積し、そのために頭部に向かう霊的心的なものの流れは、いよいよ妨害されてしまう。この過剰物質は「脂肪」である。子どもに脂肪の過剰蓄積を許すことは、その子どもによって実現されるはずである宇宙の営みを妨害することになる。

一方、人間の頭部では、霊的心的なものが堰きとめられることで、霊性の中では生命を得ていたものが凝縮され、死滅する。そこに成立するのが「神経」である。神経とは人間という生命体の内部で死滅した物質である。霊的心的なものは自身の屍体を通路として人間の中を貫流する。生命体の生きている部分を通ることはできない。

霊的心的なものに対する生命体と屍体の違いは次のとおりである。「生命体とは霊的心的なものを受け入れるがそれを通過させることをしないものです。」(248)人間の内部にあるこの生命体的部分を代表するのは「血液」である。「死んだもの、物質的なもの、鉱物的なものは、霊的心的なものを通して性格を持っています。」(248)この部分の代表が「神経」である。

視点を変更して、肉体労働と精神労働を考察してみよう。肉体労働は四肢の運動が中心であ

る。四肢は肉体を食べ、人間は疲労する。しかし四肢組織において人間の肉体を食べるのは、人間の外部にある霊性である。肉体労働とは外界にある霊性の中で沐浴することである。一方、精神労働は人間の内部にある霊性と関係する。内部の霊性が人間の肉体の死滅をはかっているのである。肉体労働は宇宙の霊性と結合しているために、本質的に霊的（精神的）であるが、精神労働は人間の肉体に作用するのみである。「人間の内部と外部の関係において、肉体的作業は精神的であり、精神的作業は肉体的なのであります。」(250)

仕事の快感や疲労感そして睡眠についての理解は次のようである。肉体労働の快感は宇宙の霊性との一致による。疲労は外側から過度に霊的にされ、霊に食べられるためである。この消費（疲労）は睡眠の間に活性化された胸部・腹部組織の活動で補充されていく。

宇宙の霊性と一致する肉体労働の快感は「意味」と結びついている。意味ある労働は人間の内部の霊的作用を充満するため疲労が少ない。怠け者がよく眠るのは無意味な働きによって内部の霊性が虚になるからである。無意味な働きとは、肉体が要求するままに行為することである。「人間は自分の肉体の要求に従うのではなく、自分の環境が要求するように行為するとき、意味ある行為をしているのであります。」(252)

（学校教育が子どもに課す身体運動は、子どもの外的な肉体を、ただ肉体が要求する方向に導こうとする傾向が強い。「競技スポーツ」はこの傾向の端的なものである。子どもにはもっと意味の感じられる運動があってよい。意味のある動きで運動を浸し切ることを目指したのが「オイリュトミー」である。）

精神的な仕事は常に生体物質の崩壊と死滅を引き起こしているのである。そのため過剰な精神作業は崩壊した生体物質の蓄積のために人間を眠れなくする。ところが難解な読書や、機械的に進行しているだけの思索を続けていると人間は眠ってしまう。一方、精神的な仕事は興味を喚起する楽しいものであるときには疲労が少ない。だから精神的な仕事は常に感情作用との相関で進行しているのである。

子どもの授業（知育）は興味を呼び起こすものでなければならない。子どものためには試験は廃止されるのが望ましい。試験のために為される勉強は子どもの成長に有害である。「何のために一体、子どもを試験するのだ？私は子どもをいつも見て来たではないか。この子どもが何を知っており、また何を知らないかも解っているではないか。」(256) 八年間を担任する教師には試験は不要なのである。

肉体労働と精神労働のそれぞれの課題を再確認しておく。肉体労働（外に向かう作業）は、意味が自覚されたものにならないといけない。精神労働（内に向かう作業）は、生命を活性化させる楽しいものにならないといけない。

#### XIV

人間の外形的な肉体の三層構造は、頭部と胸部と四肢部からなるのであった。

前に見てきたように、頭部人間はそれだけで肉体的には完成しているのである。すなわち頭部には頭部と胸部と四肢部がある。ただ頭部では、頭部以外のものが退行している。頭部にある胸部（鼻に関係するもの）と頭部にある四肢部（口に関係するもの）は、本来の胸部や四肢部に対する入口の機能しかはたさない。そのため頭部にあっては頭部の機能のみが完全に機能することとなっている。

また四肢部は頭部と「裏返し」の関係にあることも見てきた。四肢人間は上顎骨と下顎骨の変容したものである。頭部人間を小さな球とすれば四肢人間は巨大な球なのである。この四肢人間の頭部は「歯」にあたる部分のみが肉体化している。この歯が人間の四肢である。四肢人間はその口を人間の胴部（胸部・下腹部）に向け、その歯で人間を食べ続けているのである。

頭部人間の頭部は肉体となっているが四肢人間の頭部は霊的である。そして人間の肉体の形体はこの霊的頭部に捧げる犠牲を表現するものとなっているのである。

人間の頭部性と四肢性とは対立し、その中間にあって両者の関係の均衡につとめているのが人間の胸部性である。胸部は両方の働きを受ける。そこで胸部の上部は常に頭部化しようとし、下部は四肢化しようとする傾向を持っている。

しかし胸部の上部が頭部化しようとしても、肉体となっている別の頭部が妨害するため、頭部の似姿を生じるにすぎない。これが「喉頭」である。喉頭によって為されるものは、頭部になろうとする試みである。人間の「言語」がそうである。歯の抜け変わりをもちて頭部は肉体的に完成するのであるが、この時期、喉頭から生まれ出ようとする「心的な頭部」は一種の骨格組織を完成する。「心的な骨格組織」である。そしてこの時期から、子どもは文法的な言語の学習をすることができるようになる。

胸部の下部は絶えず四肢になろうとする。しかし四肢性の粗化したものが実現されるだけである。シュタイナーは明確に語ってはいないが、「性」はここに位置する。

ともあれ、人間の三層構造が正しく理解されることで子どもの教育も考えることができるようになる。例えば小学校の低学年の時期には、心性的な歯が生じてくるために読み書きを覚えることができるようになる。またこの時期には、高学年になって発展するものの萌芽が、ファンタジーとして作用し始める。四肢の本性に由来するものが胸部の生命を活性化して、子どもの心性が意志的・感情的になっているためである。

小学校の低学年の時期の教育は、知性を発達させることよりファンタジーを活発に刺激することの方が大切である。ファンタジーに働きかける授業は科学的思考に訴えるものとは違う。しかしそれで良い。シュタイナーは「ピタゴラスの定理」について、次のような説明を試みてはどうかと提案している。「ここに子どもが三人いるとする。一人は正方形のうちの一つが塵で覆われるまで息を吹きかけないといけい。次の子どもは二番目の正方形を塵が覆い隠すまで息を吹きかけ、三番目の子どもは小さな正方形について息をふきかけないといけい……(そして)一番小さい正方形の平面を覆った塵と、次の正方形を覆った塵との和は、一番大きな平面を覆った塵の量と全く同じになる、と話すのです。」(266) 子どもたちは舞い上り沈下する塵をイメージするというファンタジーを通してピタゴラスの定理を考えるのである。本当だろうか確かめる子どもは、塵を真四角に吹き寄せることができないため、より一層ファンタジーを刺激されるのである。

この年代の子どもの教師は教材をファンタジーで充満させることができないといけい。教師は「自分の扱う教材の全体をファンタジー豊かに組織し、一回毎に新鮮に形づくる努力を絶えず行っていく」(268) ことをしなければならい。ファンタジーはその都度の一回性に生きるからである。この一事を取り上げても、教師の仕事には「ある種の内的倫理性」「ある内面的な義務」(268) がある。

まず、教師は生活のどの瞬間においても心の新鮮さを失ってはならい。「汝自身のファンタジーを新鮮に保て。」(268) これは知識のひけらかしをする行為の正反対である。人間が知性として築き上げていくものは、怠惰となり無為となる強い傾向を持ち、教師は知識をひけらかす態度となりやすい。しかし教師の仕事は、知識をひけらかす態度では絶対に営めない。「知識のひけらかしは他人に対して禍をなすものであり、自分にとっては卑劣にして非倫理的行為であると言いきかせねばなりません。」(268)

次は「真理を求める勇氣」を持たなければならい、ということである。教育や授業にファンタジーを生かすことは、今日のように人々が自分の心的生活において真剣に生きることに臆病となっている時代では、「科学的ではない」と否定されやすい。ファンタジーに生きること

がそのまま悪しき主観主義に陥ることになると誤解されているためである。誤解されるファンタジーは「真理を求める」ことで排除することができる。真理を求めることはむしろ、ファンタジーがそれ以外のものに墮することを阻止することなのである。

教師の内面的義務の三番目のものは、「真理に対する強い責任感情」(270)である。先の「真理を求める勇氣」は責任感情と一体化することで完全なものとなる。教師は真理を求めていればよいのでない、真理に責任を感じて行為することが求められているのである。

シュタイナーの挙げる教師のモットーである。

「ファンタジーを生み出す才能で汝をみさせ、  
真理を求める勇氣を持て、  
倫理的責任への感覚を磨き上げよ」(271)

### お わ り に

シュタイナーの講義には繰り返しが少なくない。そのおかげで全体は徐々に明らかとなる。最初は驚きであった彼の言明も、全体を通して見つめなおすとみごとな整合性の中に生きることが理解できる。シュタイナーが彼の学校の教師となるはずの人々に語った「一般人間学」は、何を伝えようとするものだったのであろうか。

それは第一に、教師は宇宙論を基礎とする人間理解のできる人でなければならない、ということである。人間は地上に生きる限りのものであるとする理論は不十分である。人間は霊的心的肉体的存在として、その全体性において包括的に理解されなければならない。注意しなければならないのは、この包括的な理解は人間についての一つの見解とか一つの解釈であるのではなく、それ意外のものはありえない「事実」なのである。教師はこの「事実」についての共通理解を必要とする。

教師の共通理解は学校という共同体を成立させるためにも不可欠である。しかし世間の学校教育はシュタイナーの「事実」を知らない。そのため霊性の要求に応じることなどは全く考えられないものとなっている。学校教育は現代文化を推進した諸力に飲み込まれていて、現代社会の要請する人間を再生産する工場となっている。学校教育で主流となっているのは意識中心の合理主義であり唯物論である。そこでは宇宙における人間の地位や役割が問われることはない。そのため人々は地上に生きる有限な期間の自分の使命がわからなくなってきている。そのこととエゴイズムの台頭とは一つである。

第二は教育を宗教的な奉仕活動とすることである。シュタイナーは時代文化の潮流を変更しようとした。彼の教育では子どもという人間の中に現れ出てくる霊的心的なものの自己表現に対する援助が強調されている。この援助する行為は或る種の奉仕活動に他ならない。しかし誤解してはならない。この奉仕活動は相手に快適さを与えるために為される気配りや振舞ではない。そうした奉仕は行為者が自分を殺してする機嫌取りである。シュタイナーによれば教育と呼ばれる活動は、はるかにより神聖なものであり、言うならば宗教的な奉仕なのである。この奉仕は宗教的な感情に支えられており、また宗教的な感情に捧げられるものである。

そのためシュタイナーの講義を、これは宗教学校の人間形成力を世間に実証しようとする呼びかけである、と聴くこともできる。しかしそれは彼の真意ではない。シュタイナーは彼の学校が、彼の「一般人間学」も含めて一切の教義をドグマとして教えることを禁止した。彼の学校では子ども達は自由にそれぞれの信仰生活を送ることができる。だから宗教的色彩が強いという理由で宗派信仰を強要する宗教学校を連想してはならない。しかしシュタイナーの教育理解が、彼の宗教観や信仰から切り離して、それだけで理解できるとすることには無理がある。彼の数多い独創的な提言の中から、自分の実践に有効と見える部分(部品)を取り出して、活

用しようとするような試みは、あまり意味がないのではないか。シュタイナー自身が繰り返して指摘することは、教師が独創的に生きること、その都度の一回性であるファンタジーに生きることなのである。

第三は教育を芸術的活動（教育芸術）とすることである。この「教育芸術」の思想と実践こそシュタイナー教育の特徴である。しかし「教育芸術」とは何であり、また何故に「教育芸術」でなければならないのか。

シュタイナーの「教育芸術」は、先に見た彼の宇宙論を背景としている。宇宙進化との関連で一定の成長過程にある子どもの教育方法を考えると、それは芸術的であることが望ましいのである。例えば第二成長期であるところの交歯期から思春期に到るまでの子どもの教育は、知育を中心として表象活動、認識活動、記憶活動をさせるよりも、また知育が不可避であるときでも、できる限り感情や意志活動が生じるように配慮して授業が芸術的体験をする機会となるように配慮することが大切である。これはこの年齢の子どもの教育には、色や音や運動の時間をより多くして、芸術教科以外の教科の学習も芸術教科の方法を採用するのが良いということではない。「教育芸術」は、教育方法の一つの意義を強調したり、教授学の一つの領域を付け加えようとするものではない。シュタイナーの「教育芸術」は、古代の芸術がそうであったように最高に尊い仕事を表現しようとする言葉である。教育は神聖で宗教的な活動なのである。ちなみに芸術という名前と呼ばれるのが一番ふさわしいのは、陶土や色彩のような生命のない素材を扱う活動ではない。成長していく人間を扱う活動こそ「最高の芸術」なのである。

シュタイナーは彼の学校でこの「教育芸術」を実現しようとした。これは時代の文化に対する根底からの精神変革に着手することでもあった。時代の文化を特徴づけるのは自然科学的認識法であり、また研究方法である。これが数々の輝かしい成果を挙げてきたことは明瞭であり、今後も挙げていくことは予想することができる。シュタイナーはそれへの賛美を惜しまない。しかし同時に、まさにそれを理由として、時代の科学的精神とそれが生み出すものに教育を委ねることはできないと言う。自然科学のように生命のないものを扱う学問からは知識（情報）だけしか得られないのである。自然法則という形で人々が受け入れているものは自然の屍体についての知識である。人々はこの知識がもたらす生活上の効用性を味得して、この知識をますます増大させようとしているが、ここには危険な陥穽がある。すなわち生命なきものの知識が、人間の感動の源泉である情感（感情）や意志活動を弱めたり枯らしたりすることである。生命なきものの知識は「死滅へ向かう文化」を創り出しかねない。

一方、「教育芸術」は生命なきものの内から、生命あるものを再び人間の中に目覚めさせようとする。人間に必要なものは単なる情報にとどまる知識ではない。むしろ生命であり感受性そのものである。人間に必要な学問は「知識として人間の魂の中へ流れ込んだ瞬間に、直ちにそこで愛として生きる力を展開し、活動する意志として、魂の持つ暖かさを身に受けた仕事をするができる」（277）ようなものである。シュタイナーが「教育芸術」として構想したものは、人間に必要なこのような学問であることを目指した一般人間学だったのである。

この人間学を知ると同時に人間に対する愛の力を呼び覚まし、さらにその愛を実践する意志を呼び起こすものとなることが願望されていたのである。

### 参考文献

- Rudolf Steiner ; Allgemeine Menschenkunde als Grundlage der Pädagogik, Dornach 1968
- ルドルフ・シュタイナー、新田義之訳 「教育の基礎としての一般人間学」 人智学出版社。（小論の引用文は、本訳書による。一部分修正した箇所もある。引用文の未の数字は頁数である。）